

お知らせコーナー

■菅生こども文化センター ☎976-0444

こどもえんゆう会

3月29日(水)午後2時～5時

ケーキ作り・映画会・おかしパーティ

3/1から申し込み 定員50名

リーダー募集

対象 小学校6年生・中学生

日時 3月28日・29日・30日

場所 28日 事前研修(菅生こ文)

29日～30日 泊2日

(黒川青少年野外活動センター)

費用 2000円(食費・交通費)

申込書は菅生こ文においてあります。(3月18日締切り)

■蔵敷こども文化センター ☎977-2577

工作教室 4月15日(土)プラバン

午後2時～4時

新入学・進級パーティー

4月22日(土)午前11時～午後2時

会費あり

チャンピオンシップ(ゲーム)

4月26日(水)午後2時から

各コーナー申込みはセンターへ

■宮前市民館菅生分館 ☎977-4781

春休み子供劇場 3月26日(日)

11時～11時50分(開場10時30分)

「ハリネズミと雪の花」人形劇団 ひぼぼたあむ

3歳～大人 100人 無料

3月14日(火)午前10時～ 入場整理券配布開始

春休みこどもおやつ作り教室

カップケーキとイチゴのゼリー

3月30日(木) 午後1時30分～4時30分

小学生20人 教材費200円 申込みは分館へ

■菅生中学校

地域学習(中学1年生) 3月14日

地域学習発表会及び交流会 3月18日 体育館 午前9時～

卒業式 3月9日(木) 10時～ 体育館

入学式 4月5日午後1時30分

■稗原小学校

三校協議会情報交換会

3月17日 10時～

卒業式 3月18日(金)

入学式 4月5日 10時～

■菅生小学校

卒業式 3月21日(火)

入学式 4月5日 10時

場所 とどろきアリーナ・等々力緑地内「催し物広場」

テーマ 君がヒーロー!集え!闘え!未来を救え!

ちょっとおちゃめな NEW HERO 誕生!

・ライブえんそう・ダンス・もぎ店・ゲーム

川崎市青少年フェスティバル開催

日時 平成12年3月26日(日)

10時～16時(受付開始9時半より)

地域教育力って何?

宮前区地域教育会議交流会から
— 現状報告と今後の課題 —

2月15日(土)午後、宮前市民館に区内8つの中学校区の地域教育会議代表者が一同に会した。全体会で各「会議」から現状報告と課題についての報告があり、続いて、地域教育会議の方向性や事業内容についての「地域教育会議とは」部会と、おもに事務局についての「地域教育会議のあり方」部会へと分散。

早くは平成4年度にスタートし、さまざまな活動を展開し、今後の展望を提示している「会議」あり、発足したばかりで試行錯誤で歩き出した「会議」もある。どの地域もいくつかの委員会を設置し、活動母体としているが、委員会を学校毎に分担しているところもある。これは活動のしやすさという利点はあるが、地域全体を視野に入れた活動を進めるにはどうか。活動の期間が長いところほど主体的に関われる住民委員が多く(10名前後)、学校への依存度が低いことは興味深い。既成の団体代表者が多数を占めがちな地域教育会議のなかで実働メンバーを増やしたり、事務局の仕事を学校だけに頼らず、住民を中心に進めていくためのシステム改革が今後の課題のようだ。

今回は初めての試みだが、こうした交流会は活動を高めあうためにも今後も開かれることが望まれる。

菅生中学校区地域教育会議ニュースレター(23)

2000年3月8日(水)

発行 菅生中学校区地域教育会議

編集 広報委員会

事務局 稗原小学校 TEL(976)4557

コミュニティサポートネット

TEL(979)1303

とらいあんぐる菅生

学童保育



川崎市全児童施策への 「統合」計画

現在の『学童保育』が2002年の週休5日制に併せて、『小学校を活用した児童の健全育成事業』へと大きく変わろうとしています。学童保育ホールで行われた留守家庭児童の父母への説明会の感想を父母の方が寄せてくれました。

学童保育のゆくえは??

「学童保育が閉鎖される……」ことを聞き、ショックを受け、不安な心境です。

低学年の留守家庭児にとって「ただいまー」と帰って行く場所が必要です。ましてや入学したばかりの子どもにとってはなおさらです。そして働く親にとっても現在の形での学童は必要です。

我が子が通う学童は、他の施設と比べても自然に恵まれています。施設の差やそれぞれ環境、定員が異なると思いますが、役割や目的は同じで、一人ひとりの個性を把握し、指導していただいています。学校生活とは異なった、楽しさや安らぎの場としての役割をしていると思います。普段の生活では味わうことのできない経験も、多々あります。留守家庭だから預かってもらうとかお迎えに行くまで遊んでいけばいい、といった形ではなく、学童クラブでしかできない経験もあります。子どもたちだけでなく我々父母としても父母の会での情報交換、共に育て、共に学び、考えていく場としての役割も大きいのです。

今、現在の形があるのも指導員の方々やOBの父母の方々の学童クラブを支える力、長い間の歴史に守られているからではないでしょうか。

心身共に「健全に育つ」「安全に過ごす」、子どもたちにとっても父母にとっても一番のよりどころ



学童保育にて

となっていた学童保育が、いったいどのように変わっていくのでしょうか。説明会にも出席しましたが、統合された施設(小学校)での具体的な我が子の姿がまだ見えてきません。これからは動向をみつめ学んでいきたいと思っています。

学童クラブ父母

工藤 (司会：生涯学習委員会委員長)

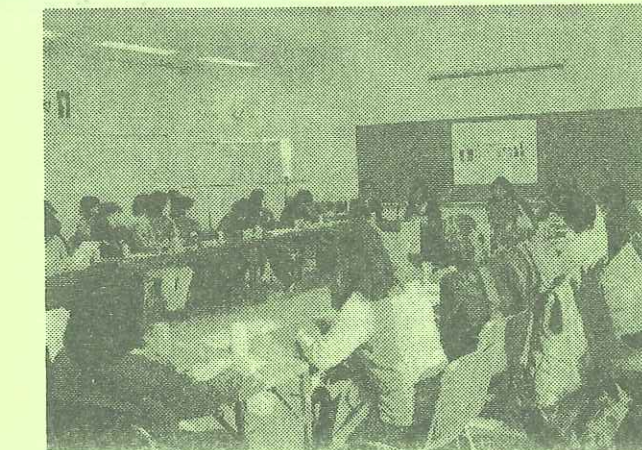
今回の「自立」は少し違った捉え方をしたい。小・中学校でも総合学習という時間を取り入れ始めた。自分で問題を見つけ、解決する方法を自分でみつ、自分で決論を出していく。その中で想像力をつけ、工夫をしていく。が必ずしも成功するとは限らない。ギャブル性もある。子どもたちの自立を促すという教育の側面がある。こういうことを始めたということは、社会が「あなた一人で生きていきなさい」という要求が強くなってきている。日本人は自立をさせない生き方をしてきたと思う。人という字は人をお互い支え合う図になっているのに気がついた。1人が自立していくと片方が倒れてしまう。お互い自立しないようになっている。英語のヒューマンというHはお互い2人が立っていて、手を結んでうまく立っているなど。中高年の人たちは、自分の生き甲斐、生き方、自分らしく生きていきたいという欲求が強くなって、社会に貢献したいという流れが大きいように思える。ここが大きなポイントとしてあるように思う。

そんな点を3人のパネラーの皆さん方に話していただきたい。

片岡道子 コピーライター、広告企画 著書に「イブとにじの森」など
 佐藤弘子 地域教育会議委員、稗原小学校PTA委員
 奥崎 隆 地域教育会議委員、菅生中学校PTA会長

片岡 3年前に出版企画がありました。それは現実本にはならなかったが、その時に書いた企画書があり、私自身の生き方に基づいたもので今回のテーマに合致するのではないかと思いますので読み上げます。『就職氷河期の女子学生・社会参加を願う主婦たちへ』というタイトルをつけ、人口の半分は女子というところで書きました。

「土曜日の午後、誰もいないオフィスで仕事をする。2週に1度は日曜日にも出勤する。片付け切れない仕事をするのに週末はなくてはならないポケット。その中には入りきらない母親量と恋人量はいつも置き去りにされているがしかたがない。私にとって何よりも大事なものは仕事なのだから。青山にある小さなプロダクションが私の仕事場である。ここまで来るのに10年かかった。私は10年前まで単なる主婦だった。それが憧れていたコピーライターになり、有限会社から株式会社になった。10年かかってというよりもたったの10年といった方が正しいだろう。これを幸運と言わずして何を幸運と言うのか。子どもの頃になりたかった職業、コピーライター、作家、雑誌の編集者、脚本家、マンガ家。物心ついた時から言葉を媒体とした表現の社



生涯学習委員会主催

「自立」というテーマは「もう、聞き飽きた」「私は自立しています」という方も多いかもしれないが、人それぞれ自立をどうとらえているか、「あなたにとって自立とは」というテーマで、あなたの出発点を問いかけるシンポジウムを行なった。

(主催：生涯学習委員会 日時：2月5日(土)午後 会場：宮前市民館菅生分館)

会に進みたいと思っていたが、21才で結婚し子どもを産み、平凡な親として道を歩んだ。結婚生活は決して幸せではなかった。子ども2人を残して別居した。離婚はそれから3年後のことである。私の職歴はそれから始まる。本当になりたいもの、住みたい家の出発点が13年前、しかも30才も半ばというすごく遅いスタートで現在がとも貴重です。もちろん仕事も順調でということではない。一瞬でも立ち止まってしまうと倒れてしまう危うさはある。仕事の苦労も人間関係の苦労も日々ついて回る。しかし、努力しただけ報われる形になる、それも実態である。望む仕事につけない、チャンスも与えられないという社会構造そのものからはみ出されてしまっている若い女性でさえそうなのだから、中高年女性は言うに及ばず、リストラの波を真っ先にかぶり屈辱と不安を感じている人が多い。社会が仕事をくれないのなら自分を作ろうというそんな人にエールを送りたい。」

といった内容です。離婚を前提に就職したのが36才ぐらゐの時。ハンドバッグひとつで家を出て3年後に離婚をし、会社に勤め、子ども2人は相手先の家に置いてきた。しばらくして会社を辞めフリーとして仕事を始め、そのとき初めて社会の波を被ったのが実感。それから10年になるまで諸々あったが、少なくとも念願は子どもを引き取ることでした。長女が高1になると、次女はその3年後高1になると引き取りました。

社会活動をしていくとき、大きなハンディがある。中年以後で経験、資格がないとき、何が必要で、今現在どこまでできるのか大きな課題となります。自分は何もできなかったし、何の力も育てていなかった、そういう状態の中で子ども2人抱えてやっていくとすれば制約や可能性が閉ざされると、エゴかも知れないがやりたいことをやり、その結果としていいものを残していきたい、子どもを含めていい形にしていきたい、そんな信念をもっていました。

極端にそんな形をとらず、何か方法があったのではないかと思われるかも知れないが私の場合はありませんでした。自分探しというとき、皆さん、本当は何がしたいのか、どう自分を表現したいのか、自己実現したいということに尽きるとは思いますが、そのなかでも女であることの限界がある。男性中心の社会構造で若さもないおばさんに冷たい。自分がやりたい、追及していきたいことをやり、仕事として認められることが自立ではないか。そのことを実現化するには得るものも失うものもある。

家族の協力があるか、批判はあるか、結婚と企業は両立するか、夫との関係は、妊娠、出産など思春期の子ども、親のこととバリアがいくつも。みんなにづらい思いをさせたくないという思いがある時は、本当にやりたいことがやれないと思っている。最終的には自分で責任をとらなければならないし、判断をしなくてはならないし、企業というビジネスの社会では自ら、ストレスや孤独にうちめされ、家族や回りの者と共有していけるのか。こういう時改めて自分の生き方というか、中年以上の女性が社会参加する時におかれている状況を考えてところがありました。

今のわたしの状況は経営的には厳しくなっていま

す。全くなにも知らない一人の女が仕事をしてきたものですから自分は社会的に信用度があるものかなど自分の中で計ってみたいものもありました。

この2年で童話を4冊出版しまして5冊目ももうすぐできます。ジャンルは違うのですが、子どもの頃文学で食べていきたいと希望がありました。下の娘がなかなか自立をしない。これはたぶん私の生き方が彼女に性格、精神的に影響を与えてしまった。20才前後になりまして、医者からも親の離婚など影響していると言われました。私には一生負い目であり、課題であり、非常に重いものになっています。これは本当の意味での犠牲であったなと思っています。それから将来のことや経済的な不安がいつまで続くかまたは戦えるか。「自立はこんなに孤独で地味なものか」という実感があります。後悔はしていない、充実はしている、それは誰にも負けない、自分の自立に対して極端に走らなくてもいい方法があったのではないか。何もかも手にいれることをしなくても、苦しむことはなかったのではないかと、ともいうこともあります。若い方が自己実現などするとき、自分があることが反映される生き方、それを人が認めてくれるのかと思う。自分が納得できるかどうか、それに尽きるとは思っています。

佐藤さん

女性が自立していくことは大変だなあと思いました。結婚して11年、子どもができて仕事をやめた。自分の手で子育てをやったかった。一番可愛い時期を自分の目で確かめたかった。下の子が小1になったとき、リストラという時代になった。今まで夏休みなど実家に遊びに帰っていたので、その旅費などの手伝いぐらいにと思って仕事を探していました。子どもが学校から帰る時間帯に家にいたい…と探してやっと1年ぐらいで仕事が見つかった。8時半から1時までというに実際に社に行ってみると、コピー機が使えない自分がとてもショックでした。10年間の子育ての間に狭い視野の中にいたんだ…と感じました。

子どもに留守番させたり、食事の支度が遅くなったりと子どもに我慢させてまで働くことはどうなのかと悩んだ。疲れて帰ると夫と子ども達に「食事は?」と言われるとガッカリして「お母さんが疲れて帰るから何かやっておこうか」と思わないのかと怒りがふつふつとわいてきました。

夫は「女は家事をするもの、男は外で働くもの」と思っています。そんな夫も少しずつ子どもに言われ、少しずつですが、自分のことは自分できるようになってきました。

自分の親を見ても思うんですが、年をとっていき、どちらかが倒れたとき、家事も出来ない自分と困ると思うので家庭はそんなことを育てている所ではないかと思いました。これからも仕事は続けていこうと思っています。

奥崎さん

結婚するとき、妻も仕事を持っていたので、当然仕事は続けるものとして2人で条約を結んだ。それぞれができることをやる。子育てで地域との仲間ができた。PTAの関わり、地域での接触など広がった。

第6回地域教育セミナー

わたしの出発点

あなたにとって自立とは

基本的には地域、家庭、学校など制約をもってやる部分と、がんじがらめになる部分がある。うまく関わらなければ喧嘩になる。1人で出来なかったことが2人だったら成し遂げることがある。少し我慢をすれば得るものがたくさんある。制約しなくても自己実現していく関係が男は働くという社会の縮図、女性は生活の基盤の計画を立てる、という。なぜこういう活動に時間を作るのかということ、会社では強制される関係、それが地域との関係、人と接触する関係と、1人でも自分でできることをやれば存在価値があるからです。

経済的、精神的にもそれほど自由にできる時間とはれない。自立を妨げる要素をやりたくなくなかった。子どもたちへ、自分たちの扉をたたこう!といたい。

(第2部 質疑応答 省略)

生きがい やりがいを見つける

工藤文比古さん (生涯学習委員長)
 全く異なるタイプの3人のパネラーの体験を基調に会場の参加者の意見を聞いてみたところ、「自立の形」には大きくわけて次のようにまとめることができると思う。
 1. 仕事を持っている。しかもその仕事が生産の基盤を大きく支えているという経済能力を持ち合わせている。2. 家族の1員として夫、妻という立場をこえて完全に家事を分担している。3. 経済的には夫の収入に依存しているが自分の存在価値を認めるためにまず外に出て働く環境の中から…という精神的自立の確立。…と形はさまざまではあるがすべてに共通して言えることは、経済力の確立があってこそなし得ている自立であるということ。人に頼らず自分の力で立つ。つまり自立とは、人間として最後の贅沢だと私は思う。この最後の贅沢ゆえに欠かせない重要な要素として生き甲斐、やりがい、というお金にも換算できない、全くその個人にしか得ることができない喜びを見出す姿勢が「わたしの自立」ではないだろうか?すなわく今現在では、自立を獲得するための環境は仕事を(経済収入)という狭い選択しかないので現状であるが、しかし今後本格的な少子高齢化社会にはいるとかならずしも経済性がともわなくても十分それに見合う利益がえられる仕事(たとえばボランティアなどの参加)など幅の広い選択ができる社会になると思われる。人間は1人では生きてはいけない。助け合いとは、助けの力と助けを受け入れるスペースと持ち合わせるのだと思う。そのメカニズムが気持ちよく働くために、個人個人の輪郭がハッキリ見え方がよい。この輪郭が自立、つまりアイデンティティなのである。なんと贅沢なことを求めるのだろうか。だから人間かも知れない。

木村 功さん (現役サラリーマン：多摩区地域教育会議)

奥崎さんが言うように「自分たちの未来を自分たちでつくる」ことが大切だと思った。今までは「学校が悪い」とか「政治が悪い」と他人のせいにしていく風潮だった。これからは、社会のしくみや自分たちが住んでいるまちを自分たちでつくりたい。子どもたちの将来を考えて、自分たちが何ができるか、現在やっている活動のなかで考えていきたい。

中島美和子さん (議長)

パネラー3人の話を総合すると、「女性は特に家族の協力がなければ仕事は続けることは難しい。一お母さんもんがらばから、あなたたちも協力してねーという家族の話し合いが大切」ということだと思えます。家事を手抜きしながらも家族の健康は守れるのでしょうか。食べることでくらい自分たちでやってほしいです。そのほうが、お互いに自立できていいかもしれません。